令和５年度「看護補助者と多職種とのタスク・シフト／シェアにチャレンジ」

所属施設　笠寺病院
担当者氏名　木下千晴

テーマ	夕食介助の多職種とのタスクシェア
現状と課題	当院は地域包括ケア病棟を有しており、入院料１を算定している。施設基準の１つに在宅復帰率 72.5%以上がある。退院支援にあたり、自宅退院や施設入所の為に求められる上位に経口摂取、排泄、歩行が挙げられる。また終末期の患者も多く ACP の中でも最後まで口から食べたい、食べさせたい希望が多い。１０年前の当院は一般、療養、地ケア病棟であったためここまで食事介助者が多くはなかった。しかし、時代と共に病院の機能が変わり、食事介助業務と嚥下に対する家族の期待が増えてきたことで業務負担が増加した。 高齢者の入院患者の経口摂取には介助する人、時間、リスクを伴う。当院での令和１年～２年にかけて窒息によるアクシデントが２件あり、リスク回避のため医療安全委員会と言語聴覚士、主任会共同で食事介助の規定を立案している。認知症患者も増加傾向にあり、先行期の問題も多く中々経口摂取が進まない。誤嚥性肺炎患者の入院も多い。そのような背景の中、朝食、夕食介助はスタッフにとって負担が多い。看護師２人、看護補助者２人で 40 人近くの患者を看る。そのうち誤嚥リスクがあり看護師による食事介助患者が常時４～８人いる。口腔ケアを含めると最低でも１人につき３０分は要する。その間、他の患者のコール対応や重症患者の看護、Ope 患者の看護、緊急入院がある。現場からは「食事介助が多くて回りきれません」等の声が聞かれる。その為、一時期、日勤者が１人残業し２人食事介助をしたら帰るということも行っていた。遅出看護師勤務等の勤務体制の変更も検討されたが子育て世代も多く、限られたスタッフへ負担が偏ってしまい困難であった。このままではスタッフも疲弊してしまい、良質な看護、介護が提供できないと考え上司に現状を報告しタスクシェアについて提案した。
目　的	窒息や誤嚥することなく安全に食事支援が出来る 患者の「食べたい」「食べられる」を継続することができる スタッフの精神的ストレス、業務の負担軽減
評価指標	アンケート
計画と経過	上司に現状を報告し、既に退職した看護師、看護補助者の食事介助の時間だけの採用をお願いした。企画委員会で話し合われた結果、先ずは院内のいるスタッフで何とかできないかという事でコメディカルへの応援を連絡協議会で報告し、院内掲示板にて募った。放射線科を初め検査科、ソーシャルワーカー、リハビリ科、栄養課へと広がり、協力を得られることとなった。応援にあたり、援助していただくこと、病棟スタッフが行うことの線引きを示し、書面を用いて説明をした。応援の初回介入前には摂食嚥下障害看護認定看護師による説明を受けてから開始することとした。先ずは慣れてもらうため１病棟のみで開始した。初めは「入れ歯ってどう扱うの？人の歯磨きってどうやるの？

	食事中の声掛けってどうしたらいい？窒息や誤嚥が怖い」などの声も聞かれたが、現在では患者への接し方も自然で、食後の口腔ケア、食事が中断した患者への声掛けや介助まで任せられるようになった。3か月を過ぎた頃から、3病棟中、食事介助者が一番多い病棟に応援に入っていただくことにしたが、当病棟が呼吸器科で有ることから誤嚥性肺炎で入院してくる患者が多く、また、認定がいることから摂食嚥下に関する患者の入院が多く、ほぼ当病棟1病棟での活用となっている。導入から8カ月が経過したため、現状把握と今後の業務改善に向けて3病棟の夜勤看護師、看護補助者、遅出の看護補助者、応援に来てくださるコメディカルに対しアンケートを行った。
結果と考察	夜勤看護師、看護補助者、遅出看護補助者のアンケートの結果では、応援体制は助かる、継続してほしいという意見が多かったが、コメントには食事介助や移乗をやってもらえるならいいが、見守りだけではありがたみを感じない。任せるより自分でやった方が安心等の意見があった。 応援者のアンケート結果では、感謝されてうれしかった。他部署の様子を知ることが出来た。他部署とコミュニケーションが図れた。病棟スタッフの助けになれたなら嬉しい等の意見が多かったが、今後も継続したいかの問いにはそう思う、まあまあそう思うが半数以下という結果になった。理由には、どこまで手を出していいのかわからず困った。病棟スタッフによってやり方が違うので統一してほしい。変更事項は伝えてほしい等、手順や具体的業務内容を求める内容が多かった。 また、コメディカルの方がタスク・シフト／シェアを理解しているが、看護師、看護補助者はあまり理解していないという結果となった。ヘルプの導入目的に関してもコメディカルは理解しているが、看護師、看護補助者は理解していない結果となった。このことからタスク・シフト／シェアに関して意識の乖離があると考える。病棟看護師が求めているのは見守りだけの応援ではなく、安心して食事介助を任せられるスタッフ。応援者が求めているのは、具体的な業務内容と指示で有ることが分かった。 今回アンケートを行ったことで、現状を知ることが出来、改善策を考えるきっかけとなった。お互い、この体制に対して反対ではないが、今後も継続していくためには話し合いの場を設け、タスクシェアの業務の調整をしていきたいと考える。